

東日本大震災と「心の花」③ 藤島秀憲

二〇一一年の夏、「心の花」は岩手県北上市で全国大会を開催、一三五人の会員が参加した。東北地方に住む人は少ないので、大部分の人が大震災と原発事故後はじめて東北の地を訪れたことと思う。「心の花」の一二月号では、四一人がそのときの様子を作品にしている。参加者の三分の一が詠んだことになる。被災地としての東北を詠むのではなく、大会アトラクションの鬼剣舞、オプシヨソツアアで行った南花巻温泉や宮沢賢治・石川啄木の記念館に取材した歌が多かった。だが、次のような歌もあった。

・東北の上空をゆくまたいではいけないものを跨ぐ心地に

古川 典子(長崎)

・陸奥みちのけの人らに詫びて愛でておりまあるい月をまあるく見つつ

岡部 和美(富山)

・ボランテアの人も居るらむ朝早い新幹線で向かふ北上

高山 邦男(東京)

三首に共通する意識は罪悪感である。被災した人に対して、何も役に立てずに、観光に行く(来た)ことの申し訳なさである。震災があった年ならではの旅行詠だ。これら「行った者の歌」に対して「去った者の歌」がある。

・いたましましきものごとくに夫は言へどかはゆし息子の宮崎なま
り

大口 玲子(宮崎)

・宮崎へわざわざ送られ来し野菜 東日本産をことごとく捨つ

震災当時は宮城県に住んでいた大口だが現在は宮崎県に移り住んでいる。理由は書かずとも、歌を読めば明らかだろう。昨年七月号の時評で、わたしは竹山広の『千日千夜』から「居合はせし居合はせざりしことつひに天運にして居合はせし人よ」を引用したうえで「居合わせてしまったためにその後長期間にわたり居合わすことになる人がいる」と書いた。大口は被災地を去った今も確かに居続けているし、去ったがために余計に長いこと居合わせることになるのではないか。

・何事もなかつた様にさるすべり咲き、咲き終り時は逝かむか

本田 一弘(福島)

・バサバサと剪られて転がる青い柿柿の無念はわれの無念だ

昆 キミ子(福島)

・水槽に飼はるる金魚かたむける家を知らずに平らに泳ぐ

間宮 清夫(千葉)

「残った者の歌」である。放射能は目に見えないだけに「何事もなかつた様」という表現が突き刺さってくる。収穫を諦めなくてはならない無念さが「バサバサ」「転がる」により強調された。三首目は液化化現象、他の作品から家を建て替えることになったとわかる。家族にも早く平らな家で生活させたいと願う作者。

行った者、去った者、残った者、それぞれの立場から被災地東北と観光地東北が詠まれた二〇一一年の夏であったが、被災地を訪れてはじめて震災を歌うことができたという人もいる。

・震災の歌を歌ひ得ぬ日の続き北を歩みてやうやく歌ふ

大津 貴寛(東京)

大津の他の歌から察するに東北は父祖の地、それゆえに歌えずに来たことが情けなく、もどかしかったのだろう。